Osaka University Knowledge Archive

Title	2023年度 日本語2（講読）実践報告
Author(s)	吉川, 夏渚子
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 47-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95473
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

2023 年度　日本語２（講読）実践報告

吉川 夏渚子

1.　はじめに

本稿は、2023 年度の授業「日本語２（講読）」の実践報告である。

春夏学期では、読解力の向上とともに文章理解に必要な語彙と表現の力を伸ばすこと、また大学生活や日常生活など、さまざまな場面で必要とされる敬語や、メールの書き方を身に付けることを授業の目標として掲げた。秋冬学期では、春夏学期に身に付けた力をベースに新聞記事を読み、①内容を正しく理解する、②自分の意見を論理立てて相手にわかりやすく伝える、③テーマについて他の学生と意見交換ができることなどを学習目標とした。

成績評価は、平常点（出席や授業への参加度）、提出物、小テスト、発表により行った。

2.　春夏学期の授業概要

第 2～5 回の授業では、敬語とメールの書き方を取り扱った。

敬語は、毎年事前のアンケートで「理解はできているが、なかなか使う機会がない」や「アルバイトをしているが、とっさに出てこなくて困った」などの回答がみられたため、まず敬語の種類や形の確認をし、残りの時間を練習時間にあてた。練習では、プリント問題に加えて、学生が実際に遭遇しそうな場面（アルバイトでの面接や接客、教師や部活動の先輩とのやり取り等）を想定したペアによる口頭練習を行った。

メールは、日本人同士でも心理的負担がやや大きい「依頼」と「断り」を扱った。最初に、他のコミュニケーションツールとの違いを確認し、メールを送る上で必要なマナーを解説した。その後、依頼や断りのメールを送る際、どのような構成でどのような表現を用いるのかをそれぞれ回を分けて説明した。課題では、依頼のメールは「ゼミ発表の日程変更をお願いする」、断りのメールは「教師からの依頼（イベントの手伝い）を断る」という内容で教師にメールを送らせた。提出されたメールは、翌週の授業で学生全員にフィードバックを行った。授業後の学生のコメントシートには「大学で実際にメールで先生とやりとりすることがあるので、とても役に立っている」や「入学時からＥメールを使うことが多いので学べて良かった」などが書かれており、１年次の初期に扱う活動項目として非常に実用的であることがうかがえる。

第 6～11 回の授業では、慣用句とオノマトペ、そして連語を取り扱った。

慣用表現は、身体の部位にかかわる表現のみとした。授業冒頭で慣用句のクイズを出し、学生のレベルをある程度把握してから、400～500 文字程度の短めの新聞記事を読ませ、その中に出てくる慣用句の意味を前後の文脈から推測させる活動を行った。課題として、慣用表現を使ったミニ作文を出した。

なお、敬語や慣用句、オノマトペ、連語の項目を扱った後には学生の理解度を確認するため、その都度小テストを実施した。

第 12～13 回の授業では、秋冬学期に実施するプレゼンテーションに備えて、相手にわかりやすく伝える話し方の練習を行った。今回の授業では、PREP 法[i]という分かりやすい説明や文章を構成するための手法を紹介した。第 12 回の授業で PREP 法の概要説明と、ワークシートを用いた練習を行った。第 13 回では、新聞記事のグラフやデータを使って、口頭で説明する練習をグループに分かれて行った。概ねどの学生も PREP 法の流れに沿って説明をすることができていたが、理由と具体例の内容が一致しなかったり、接続詞を適切に使えなかったりする学生も見られた。そのため、途中で教師から全体に向けてフィードバックを行った。

PREP 法を用いた活動について、授業後の学生のコメントシートには「授業だけでなく普段の日常生活でも役に立ちそうだと思う」や、「これまで話す順番など意識したことがなかった。ほかの授業でも発表も多いので、これからも相手にどういう順番で何を話せば伝わりやすくなるのか意識したい」と、分かりやすく伝えることの必要性について触れられていた。

表１　授業概要（全 30 回）

回	授業概要	使用教材、内容
春夏学期		
1	オリエンテーション	内容：春夏学期のコース説明、アンケート、他己紹介
2～3	敬語の基本	教材：自作プリント 内容：尊敬語・謙譲語・丁寧語、クッション言葉 等
4～5	メールの書き方	教材：自作プリント 内容：メールのマナー、「依頼」と「断り」の表現と練習
6～7	慣用句	教材：自作プリント、新聞記事 内容：身体の一部を使った慣用句を中心に扱う
8～9	オノマトペ	教材：自作プリント、新聞記事 内容：身体の状況を表す、食感のオノマトペ
10～11	連語	教材：自作プリント、新聞記事
12～13	説明の仕方を学ぶ	教材：自作プリント 内容：PREP 法を用いた聞き手に伝わる話し方の練習
14	新聞の読み方について	教材：自作プリント、新聞 内容：新聞の種類の説明、構成、表現等
15	振り返り	内容：コースの振り返り、夏休みの課題説明
秋冬学期		
16	オリエンテーション	内容：秋冬学期のコースの説明、ビブリオバトルの説明
17～20	グループ活動を通した講読、グループ発表（質問づくり）	教材：自作プリント、新聞記事 内容：質問の種類の説明、記事精読、質問づくり（テーマ決め）、グループ発表
21～26	学生による発表	教材：新聞記事、予習ワークシート、振り返りシート 内容：気になる記事の発表
27	講読（CC 活動）	教材：自作プリント、新聞 内容：新聞１紙を手に取り、各自興味のある記事を選び発表
28～29	ビブリオバトル	教材：各自推薦図書 内容：学生が選んだおすすめの本を５分間で紹介
30	振り返り	内容：コースのふり返り、アンケート

3. 秋冬学期の授業概要

第 21～26 回の授業では、各々が興味関心のある記事を選び、パワーポイントを用いて 15 分程度の発表を行った。発表前には、記事を効率的に探す方法の一つとして、大阪大学附属図書館のデータベースの使い方を学生に紹介した。また、パワーポイントを使っての発表は初めてという学生がいたため、過去同じコースを受講していた学生の発表資料を見せながら[ii]、パワーポイントの構成、文字の大きさ、スライドのタイトルの付け方、参考文献の書き方についてなど、基本的な説明を行った。

学生が発表した記事は、「外国ルーツ生徒 大学進学を支援」(2023 年 10 月 13 日付 読売新聞）や、「就活「らしさ」押し付けないで」(2021 年 5 月 17 日付 朝日新聞）といった学生たちにとって身近な話題から、「日銀緩和に修正観測、YCC・マイナス金利 どこが焦点？」(2023 年 7 月 15 日付 日本経済新聞)「多発するヘイトクライム 弁護士が注目する条例案は何が先進的か」(2023 年 6 月 22 日付 朝日新聞)、「英国：彫刻返還、行方は？ 英、貸し出し／ギリシャ、正式返還 大英博物館」(2023 年 1 月 22 日付 東京新聞）といった日本国内外で起きている社会や経済、国家間の問題など、取り扱うテーマは多様であった。

発表は、第 17～20 回にグループで行った「質問づくり」の活動[iii]と同様の発表構成で行うこと、つまり記事の内容から自ら問い（＝テーマ）を立て、その問いに対する結論や自分の意見を、根拠とともに説明することとした。加えて、背景知識が必要な場合は、説明を加えるよう指示した。なお、当日発表に当たっていない学生は、予習として発表者の記事を

事前に読み、教師が作成したワークシート[iv]を完成させて授業に参加した。

発表後、聞き手の学生はどの発表に対しても高い関心を示し、積極的に質問をしていた。質問内容は、理解しきれなかった箇所の確認や、発表者の意見・考えを問うものが多かった。一方で、何を聞きたいのか質問者の意図が汲み取りにくい質問や、本質から外れた細部を問うような質問も散見された。批判的思考の育成という観点から、質問することの意味について事前に学生に考えさせられなかったのは反省すべき点である。

発表後は、以下の通り発表者ができるだけ多様な観点から気付きを得られるよう評価を行った。

①発表者は振り返りシートを書く[v]

②発表者以外（聞き手）の学生は発表の良かった点・改善点をシートに書く

③教師は、どの学生にも理解しておいてほしい点については口頭でコメントし、それ以外はシートに記載し、②とともに発表者に翌週渡す

第27回の授業では、宮（2018）を参考にCC（キャスター＆コメンテーター）活動を行った。この活動は、事前の準備なく授業内で完結するものである。活動の流れとして、まず教師が準備した新聞を各自一紙手に取り、その中から気になった記事を一つ決める。記事を読んだ後、ワークシートに記事の概要と自分の意見を書き込む。その後、グループに分かれて１人ずつ1、2分程度で発表し、その後聞き手の学生から１つずつ質問を受けるといった手順で進んでいく。発表者はキャスターになったつもりで記事の概要を分かりやすく説明するとともに、コメンテーターのように自分の意見も述べなければならない。限られた時間内に記事を読んで理解する力と、それを聞き手に分かりやすく伝える力が必要である。

同様の活動を行った過去の授業では、発表者が記事の語彙をそのまま用いて話すことで、聞き手の理解が追いつかなくなってしまうことが度々あった。そのため、固有名詞や専門的用語は、補足したり平易な言葉に換えたりすること、また漢字で意味が捉えられても耳にしたときに理解しづらい語彙などは、別の言葉にかえるなどして工夫することを活動前に指示した。このような注意点を考慮しながら、どの学生も聞き手を意識して話していたため、例年に比べて内容の伝わりやすさに違いがみられた。また、前年度までは内容を相手に正確に伝えようとするあまり、ワークシートに書いたことを一言一句そのまま読み上げる学生が少なくなかった。しかし、今回はワークシートには必要なポイントを箇条書きにし、メモを見る程度で話すというやり方で進めるようにしたため、どの学生も聞き手の顔を時折見ながら、自らの言葉で「伝える」ということに意識が向けられているようであった。

4. 学生の反応と今後の課題

学生の反応は、普段の授業中での様子や出席カードのコメント欄、学期末のアンケートから得た。

一年の授業を通して、学生が興味深かったと感じていた活動の一つに、新聞記事を用いた個人発表（第21～26回）があった。学生からは「自分の興味のある記事について詳しく調べ、自分の考えをまとめることができた」や、「説明したい内容をどのように説明すれば相手に伝わるかを考えさせられた」、「自分ではまず触れようと思わなかったテーマについて知ることができて視野が広がった」といったコメントがあった。発表を通して、自分の考えや相手の考えをクラスの仲間と共有することに喜びを感じているようであった。

本授業で学習目標として掲げたことについては、おおむね達成できたかと思われる。しかし一方で、課題も残った。グループ活動では、各々の意見を忌憚なくぶつけ合う活発な議論が見られた。しかし、なかにはグループ活動を苦手とする学生もいて、自分の意見とは異なる相手の意見を聞き入れることができず、最後まで話がまとまらないグループも出た。これは昨年度でも挙がっていた課題であった。教師から事前にグループで活動を行う意図を伝えたつもりであったが、合意形成を促すような指導が十分にできなかったのは反省点である。次年度の改善点としたい。

【参考文献】

神田靖子他（2011）『連語を使おう―文型・例文付き連語リストと練習問題』古今書院

ダン・ロススタイン、ルース・サンタナ（2015）吉田新一郎訳『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論

宮弘美（2018）「新聞を活用した授業―NIEにチャレンジ！」日本語教育の夏フェス 2018 発表資料 pp. 97-100.　ことばと学びでつながるなかまの

会

[i] PREP 法とは、Point（結論・主張）、Reason（理由・根拠）、Example（具体例）、Point（結論・主張）の頭文字をとったもので、P→R→E→P の順番で話すと相手にわかりやすくメッセージを届けることができるという、話の構造の一つである。
[ii] 学生本人には事前に許可をもらった上で紹介した。
[iii] ロススタイン・サンタナ（2015）による、３つの思考（発散思考、収束思考、メタ認知思考）を育てる方法「質問づくり」をもとにグループ活動を行った。
[iv] ワークシートの項目は言葉調べ、記事の要約、授業で発表者に確認したいことや疑問に思ったことなどである。
[v] 振り返りシートには、うまくいった点、うまくいかなかった点を理由とともに、また発表準備で何を学んだのか等を記述してもらった。